

『最初の鍵——第2席 まふい』

——帰ってこい。その声を聞いた夜。まふいは眠れなかった。

深夜のヨルファミリア本部。十脚の椅子が並ぶ円卓会議室〈椅子の部屋〉に、まふいが一人で座っている。誰もいない。静かな部屋。首元にはいつもの鍵付きの黒いチョーカー。まふいはその鍵へ触れた。

「……………」

——ドクン。地下から届いた、あの鼓動。——帰ってこい。知らない声。知らないはずの声。なのに——

「……………」

どうして、あんなに懐かしかったんだろう。目を閉じる。そして、まふいはずっと昔のことを思い出した。ヨルファミリ



アがまだ存在しなかった頃。ヨルが総帥ではなく、まふいが第2席でもなく、二人がまだ、出会ってすらいなかった頃を。

まふいは自分がいつから強かったのかを知らない。物心がついた時にはもう、普通ではなかった。力を込めれば、物が壊れた。怒れば、周囲が壊れた。恐怖を感じれば、もっと壊れた。だから、まふいは感情を出さなくなった。笑わない。泣かない。怒らない。誰かへ近づかない。そうすれば、壊さずに済む。そう思っていた。けれど、それでも、力は消えてくれなかった。

「……………」

ある夜。まふいは一人で森を歩いていた。目的地はない。帰る場所もない。ただ、人がいない場所を選んで、歩いていた。月だけが道を照らしている。静かだった。まふいは静かな場所が好きだった。誰もいなければ、傷つけない。誰もいなければ、怖がられない。誰もいなければ、自分も何も感じなくていい。その時だった。茂み。音。



「……………」

まふいが止まる。何かがいる。獣ではない。人でもない。異形。黒い影がゆっくりと姿を現した。一体。二体。三体。まふいを囲む。

「……………」

怖くない。少なくともそう思った。一体が飛びかかる。まふいは腕を振った。それだけ。——轟ッ！！異形が消えた。吹き飛んだのではない。身体そのものが耐えられなかった。残る二体が止まる。まふいも自分の手を見る。

「……………」

また。やった。敵だった。だから、倒してもいい。それでも、胸の奥に嫌な感覚が残る。二体目。まふいへ飛びかかる。

「来ないで」

一撃。地面が割れた。木々がまとめて薙ぎ倒される。異形が消える。そして、三体目。逃げた。



「……………」

追わない。まふいはその場に立っていた。荒れ果てた森。自分の周囲だけ。何も残っていない。

「……………また」

小さな声。

「壊した」

その時、遠く。誰かがこちらへ歩いてくる。

「……………」

まふいが振り返ると、長い黒髪の少女がいた。暗闇の中でも、妙に目立つ。その少女は破壊された森を見た。そして、まふいを見た。

「……………」

まふいは身構える。いつもなら、すぐに逃げていた。でも、少女の方が先に口を開いた。



「すごいね」

「……………」

まふいは意味が分からなかった。「怖い」「化け物」「近づくな」——今まで、そんな言葉なら知っていた。

「……何が」

「これ」

少女が周囲を見る。

「あなたがやったんでしょ？」

「……………」

まふいは答えない。少女が一步近づく。

「来ないで」

「どうして？」

「……………」

「危ないから」



少女が止まる。

「私が？」

「違う」

まふいは自分を見る。

「私が」

「……………」

少女は少しだけ考えた。そしてまた、一步。進んだ。

「来ないで！」

地面にひびが走り、力が漏れる。普通なら、ここで、逃げる。
なのに、少女は逃げなかった。

「大丈夫」

「何が」

「私」

少女が自分を指差す。



「結構強いから」

「……………」

まふいは初めて、その少女をちゃんと見た。

「誰」

「ヨル」

少女が答える。

「あなたは？」

「……………」

長い沈黙。それでも、なぜか言ってみようと思った。

「まふい」

「そっか」

ヨルが笑う。

「よろしく、まふい」



「……………」

よろしく。その言葉をまふいは久しぶりに聞いた。

二人の最初の会話は、それだけだった。翌朝。まふいが目を覚ます。

「……………」

木。空。そして――

「おはよう」

「……………」

ヨルがいた。

「なんで」

「何が？」

「いるの」



「昨日ここで寝たから」

「なんで」

「まふいがいたから」

意味が分からない。

「私」

「危ないよ」

「聞いた」

「……………」

「でも」

ヨルが朝食を差し出す。

「お腹空いてない？」

「……………」

まふいは食べ物を見る。そして、ヨルを見る。



「毒？」

「入れてないよ!？」

「どうしてくれるの」

「一人で食べるより二人の方がいいから」

「……………」

まふいは受け取らない。ヨルは隣へ置いた。

「食べたくなったら食べて」

そう言って、自分の分を食べ始める。

「……………」

まふいはずっとヨルを見ていた。十分後。

「……………」

手を伸ばし、一口食べる。ヨルが見る。

「どう？」



「普通」

「そっか」

少し嬉しそう。

「……………」

「何？」

「なんで嬉しそうなの」

「食べてくれたから」

「変」

「そう？」

「変」

それが、二人で食べた最初の食事だった。

ヨルは翌日もいた。その次の日もいた。



「なんでついてくるの」

「行く場所ないでしょ？」

「ヨルも？」

「私はある」

「じゃあ帰れば」

「まふいは？」

「……………」

「ない」

「じゃあ一緒に探そ」

「何を」

「帰る場所」

「……………」



分からない。この人は何を言っているんだろう。まふいは何
度もヨルを置いていこうとした。速く歩いた。遠くへ行った。
夜中にこっそり出たこともある。それでも、

「まふい」

「……………」

見つかる。

「勝手にいなくならないで」

「どうして」

「心配するから」

「しなくていい」

「私がするの」

「……………」

面倒だと思った。なのに、少しだけ嬉しかった。



ある日。二人は小さな町へ立ち寄った。まふいは人混みを避ける。ヨルの後ろ。

「まふい」

「何」

「近い」

「.....」

少し離れる。数秒。また近づく。ヨルが振り返る。

「怖い？」

「違う」

「じゃあ？」

「人が多い」

「それを怖いって言うんじゃない？」

「違う」

「そっか」



ヨルはそれ以上聞かなかった。ただ、歩く速度を少し落とした。まふいが離れなくて済むように。

「……………」

まふいはヨルの服の端を小さく掴んだ。ヨルは気づいた。でも、何も言わなかった。その日の夕方。事件は起きた。異形。町へ侵入した。人々が逃げる。悲鳴。混乱。まふいの呼吸が僅かに乱れる。

「まふい」

ヨルが呼ぶ。

「ここにいて」

「ヨルは？」

「倒してくる」

「……………」

ヨルが走る。まふいはその背中を見る。戦闘。強い。初めて会った時、ヨルは言った。——私、結構強いから。その言葉



は嘘ではなかった。一体。二体。ヨルが倒す。まふいはただ見ている。自分が戦えばもっと早い。でも、町ごと、人ごと壊してしまう。だから、動かない。その時、別方向。一体。ヨルの死角。

「……………」

まふいの身体が勝手に動いた。一瞬で異形の前へ踏み込み、拳を振るう。

「——っ」

止める。力を抑える。抑える。抑える。それでも、異形は吹き飛んだ。だが、町は壊れない。人も無事。

「……………」

まふいが自分の手を見る。できた。初めて、壊しすぎなかった。

「まふい！」

ヨルが駆けてくる。



「大丈夫!？」

「……………」

まふいはヨルを見る。

「今」

「うん」

「壊さなかった」

ヨルが周囲を見る。そして、笑った。

「うん」

「ちゃんと守った」

「……………」

まふいは「守った」という言葉を知らなかった。自分の力は壊すもの、それだけだと思っていた。

「私が？」

「うん」



「……………」

まふいは自分の手を見る。初めて、自分の力を少しだけ嫌い
ではないと思った。

それから、ヨルはまふいと戦うようになった。敵としてでは
ない。訓練。

「もう一回」

「壊れる」

「私なら大丈夫」

「本当に？」

「うん」

「……………」

まふいが踏み込む。ヨルが受ける。衝撃。

「まだ強くていいよ」



「……………」

もう一撃。

「もっと」

「ヨル」

「何？」

「変」

「また？」

「普通」

「私と戦わない」

「普通じゃないから」

ヨルが笑う。

「お互い」

「……………」



まふいは少しだけ笑った。本当にほんの少し。ヨルが止まる。

「今笑った？」

「笑ってない」

「笑った！」

「笑ってない」

「もう一回！」

「嫌」

「なんで！？」

「ヨルうるさい」

「初めて見たのに！」

まふいは顔を逸らした。でも、口元はほんの少し上がっていた。



穏やかな時間。ずっと続けばよかった。だが、まふいの力はそんなに簡単ではなかった。その日の相手は、今までより遥かに強い異形だった。ヨルとまふいが二人で戦う。まふいは力を抑え、ヨルが前、まふいが横へ付く。

少しずつ、二人の戦い方が形になっていた。けれど、一瞬の隙を突いた異形の爪が、ヨルの腕を浅く裂いた。流れた血は、ほんの少し。それだけだった。

「……………」

まふいが見た。赤。ヨルの血。——ドクン。

「……………？」

まふいが胸を押さえる。何かがおかしい。

「まふい？」

ヨルが振り返る。——ドクン。視界が赤い。音が遠い。自分の中で、何かが開く。

「まふい！」



ヨルの声は聞こえる。それでも止められない。瞳が緋色に染まり、今まで抑えていた力がすべて溢れた。それは、後の最大180秒のリミッター解除として制御される前の、その原型となる未制御現象だった。

「——」

一撃で異形が消えた。それだけではない。地面も、木も、岩も、周囲のすべてが崩れていく。

「まふい！」

ヨルが近づく。

「来ないで！」

まふいが叫ぶ。初めて、恐怖をむき出しにした。

「ヨル！」

「来ないで！」

「殺す！」



「私が！」

「ヨルを！」

「……………」

ヨルは止まらなかった。

「来ないでって！」

「嫌」

「なんで！」

「まふいが泣いてるから」

「……………」

泣いている。言われて初めて、頬を伝う涙に気づく。

「私は」

「危ない」

「知ってる」



「ヨルを殺すかもしれない！」

「させない」

「無理！」

「無理じゃない」

ヨルが一步、また一步と近づく。

「まふい」

「……………」

「私を見て」

その言葉に、まふいが顔を上げる。ヨルの血を見て、また力が跳ねる。

「っ……！」

それでも、ヨルを見る。

「大丈夫」

「大丈夫じゃない！」



「大丈夫」

「私がいる」

「……………」

「まふい」

ヨルが手を伸ばす。

「戻っておいで」

「……………」

その言葉に、なぜか胸が痛んだ。——帰って。一瞬、知らない声がした。ヨルではない。もっと遠く、もっと深い何か。——帰ってこい。

「……………？」

まふいの目が揺れる。

「まふい！」

ヨルの声で、意識が戻る。



「ヨル……」

「うん」

「ヨル」

「ここにいる」

緋色がゆっくりと消えていく。力が収まる。そして、まふいの身体が崩れた。ヨルが抱き止める。

「まふい！」

「……………」

「ヨル」

「何？」

「生きてる？」

「生きてるよ」

「……………よかった」

それだけ言って、まふいは意識を失った。



目を覚ました時も、ヨルがいた。

「……………」

「おはよう」

「……………ヨル」

「うん」

「血」

「もう止まった」

「……………」

まふいがヨルの腕を見る。包帯。

「私」

「何した」

ヨルは少し黙る。



「異形を倒した」

「それだけ？」

「……………」

「嘘」

ヨルは嘘が上手ではなかった。

「周り」

「壊した？」

「少し」

「少しじゃない」

「……………」

まふいが布団を握る。

「やっぱり」

「私」



「いない方がいい」

ヨルの顔から、笑みが消える。

「どうして」

「危ないから」

「ヨルが血を流したら」

「私」

「また」

「……………」

「ヨルを殺すかもしれない」

「それは嫌」

「私も嫌だよ」

「じゃあ」

「違う」



ヨルがまふいの前へ座る。

「まふいがいなくなるのが嫌」

「……………」

「だから」

机。そこに何かが置かれていた。黒い革。金属。小さな鍵。

「何」

「考えた」

ヨルがそれを持ち上げる。

「まふいの力を」

「普段は抑える」

「……………」

「完全じゃないかもしれない」

「でも」



「何もしないよりいい」

まふいが黒いそれを見る。チョーカー。

「首」

「苦しくない？」

「そこ？」

「大事でしょ」

「……………」

ヨルが少し笑う。

「嫌なら別の方法考える」

「つける」

即答。

「いいの？」

「うん」



「……………」

まふいが髪を上げる。首元。ヨルがチョーカーをそっと巻く。
かちり。音。そして、鍵。

「……………」

まふいが触れる。

「ヨル」

「何？」

「鍵」

「うん」

「管理して」

ヨルが止まる。

「私が？」

「うん」

まふいが胸元の鍵付き機構へ触れたまま、ヨルを見る。



「解除するかどうか」

「ヨルが決めて」

「……………」

「私の力」

「ヨルが止めて」

ヨルは、その言葉を軽く受け取らなかった。

「分かった」

チョーカーから外すことなく、胸元の鍵へそっと触れる。

「私が管理する」

まふいが小さく頷いた。それが始まりだった。鍵付きの黒いチョーカー。まふいの力を閉じ込めるもの。そして、その鍵の管理と解除の判断をヨルへ委ねた日。まふいは自分の力だけではなく、自分自身をヨルへ預けた。



それから、二人は一緒にいるようになった。本当にずっと。

「ヨル」

「何？」

「どこ行くの」

「買い物」

「私も行く」

「うん」

「ヨル」

「何？」

「誰と話してたの」

「お店の人」

「長い」

「普通だよ」



「……………」

「怒ってる？」

「怒ってない」

「顔」

「普通」

「そっか」

「ヨル」

「今度は何？」

「隣」

「？」

「私」

「ここ」

ヨルの隣を指差す。



「……………」

ヨルが笑う。

「うん」

「そこ、まふいの場所ね」

「……………」

その時のヨルの何気ない一言を、まふいは後々まで恐ろしいほど律儀に覚えていた。

やがて、二人は小さな拠点を持った。広くない。立派でもない。机。簡単な棚。そして、椅子。二脚。

「……………」

まふいが椅子を見る。

「二つ」

「うん」



ヨルが一脚を指す。

「私と」

次に、もう一脚。

「まふい」

「……………」

まふいは自分の椅子へ座る。隣にはヨルがいる。

「どう？」

「普通」

「また普通？」

「……………」

少しだけ間を置いて、

「悪くない」

ヨルが笑う。



「そっか」

まふいはその横顔を見る。帰る場所。昔。ヨルが言った。——一緒に探そ。あの時。まふいには意味が分からなかった。今なら、少し分かる。場所だけではない。誰かがいる。帰れば、その人がいる。それを帰る場所と呼ぶのかもしれない。

「ヨル」

「ん？」

「明日もいる？」

「いるよ」

「明後日」

「いる」

「その次」

「いるよ」

「ずっと？」



ヨルがまふいを見る。

「まふいが嫌って言うまで」

「……………」

「じゃあ」

まふいはヨルの服を掴んだ。昔。町で、初めてそうした時と同じように。でも、今度は、隠さない。

「ずっといる」

「うん」

「ヨルも」

「うん」

「約束」

「約束」

二脚。それがヨルファミリアの最初だった。そしてまふいはヨルファミリアとして、最初の正式な仲間になった。まだ名



前すら今ほど大きな意味を持っていなかった頃。第1席も第2席も総帥も何もなかった頃。

ただ、ヨルがいて、まふいがいた。まだ二人だけだった。やがて雨の日、一人の少女が二人の前へ現れる。人の弱点が見えすぎる少女。レモン。三脚目の椅子。原初の三人。でも、それはもう少し先の話。

「……………」

まふいが目を開ける。現在のヨルファミリア本部。目の前には、十脚の椅子がある。二脚だった。三脚になった。そして、十脚になった。まふいは首元の黒いチョーカーへ触れる。

「……………」

ヨルとの約束。ヨルへ委ねた鍵の管理と解除判断。自分がここにいる証。それなのに、地下から「帰ってこい」という声が届いた。まふいは眉を寄せる。

「帰る……？」



違う。ここだ。自分の帰る場所はここ。ヨルのいる場所。

「まふい？」

「……………！」

振り返ると、眠そうな顔のヨルがいた。

「こんな時間に何してるの？」

「ヨル」

「うん？」

まふいは立ち上がり、何も言わずにヨルへ抱きついた。

「わっ」

「……………」

「まふい？」

「少し」

「このまま」



ヨルは理由を聞かず、ただまふいの背中へ腕を回した。

「うん」

「……………」

まふいが目を閉じる。ヨルの心臓の音が聞こえる。——トクン。——トクン。地下の巨大な鼓動とは違う。知っている音。安心する音。

「ヨル」

「何？」

「私の帰る場所」

「……………？」

「ここ」

ヨルは意味を完全には理解していなかった。それでも、

「うん」

そう答えた。



「ここにいていいよ」

「……………」

まふいの腕に少しだけ力が入る。

「知ってる」

そして、その夜。二人が眠りについた頃。遙か地下。黒い薊が——ドクン、と脈打ち、第2席の印が緋色に光る。その奥で、何かが囁いた。

「……………違う」

——ドクン。

「そこじゃない」

亀裂が一本走る。

「おまえが」

「帰る場所は——」



そこで、声が途切れた。まだ答えは明かされない。そして、地上。眠るまふいの首元。黒いチョーカーが誰にも気づかれないほど。ほんの僅かに震えた。まふいは知らない。あの日、初めてヨルの血を見て、力が暴走した瞬間。

ヨルの声とは別に聞こえた。——帰ってこい。あの声と、地下から自分を呼んだ声と同じだったことを。ただ、一つだけ確かなことがある。まふいにとって、始まりは地下ではない。力でもない。鍵でもない。

一人だった少女へ、怖がらず手を伸ばしたヨル。そして、二脚の椅子。そこから、すべてが始まった。

——了。

